Dearest

奏多

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｄｅａｒｅｓｔ

【Ｎコード】
Ｎ９９１７Ｂ

【作者名】
奏多

【あらすじ】
無気力に生きていた智也の前に、ある日新任の教師・亜希が現れる。初めは彼女に嫌悪感を抱いていた智也も、いつしか興味を持つようになる……。教師と生徒の危険で純粋な、それでいて切ない物語です。

Prologue

彼女は突然俺の前に現れて、一瞬にして俺の心を釘付けにした。
あの頃は本当に幸せだった。だから、何も後悔なんてしていない。
君もそう思ってたらいいんだけど……。
こんなこと面と向かって言うなんて恥ずかしすぎるけど、

君と出逢ったのは、運命だったと思うんだ

君に逢う日まで、俺の見ていた世界はモノクロだった。何も色がなく、音も無い世界。

君と出逢った瞬間、俺の周りはカラフルになった。

好きだ、とか
愛してる、とか
そんな簡単な言葉で表せることなんて、できなかった。

俺にとっては

かけがえのない想い出なんだ――――――…。

Chapter1

それまでの俺は、何に対しても無気力で、思い立ったら学校に行き、ノートもとらずに自分の世界に篭っていた。卒業さえも眼中になく、飽きたらやめればいいと思っていた。
周りとも壁をつくり、その内側へは誰も入れようとはしなかった。
そんな俺を相手にする奴も一人、また一人と減り、しまいには学校では浮いた存在になっていた。
教師さえも俺を《問題児》扱いをする。最初は好意的に接してきても、自分の思い通りにならない生徒は見捨てる。そういうものだ。

そんなある日、教壇に上った彼女に、初めて会った。

彼女の姿が目に入った瞬間、目を奪われた。

茶色がかった長い髪が、黒いスーツの肩にかかり、首には上品なネックレス。
色白の顔に、形のよい鼻と唇。そして何より、彼女の瞳に、心奪われた。

彼女は『加野亜希』と紹介した。
今年から来た、新卒新任の英語教師。何でもJ大卒らしく、ロスにも留学していたらしい。
高学歴の金持ちエリートは、最も嫌いなジャンルだ。賢い奴ほど何

も知らないくせに近寄ってきて、偽善的な言葉をかけて去っていく。

解りやすい加野の授業は好評だった。さらに気立てもいい彼女は、たちまち校内の人気の的になった。

信じてなかった。

誰でも人間なら、裏には黒い影があるものだ。
どんな善人でも、内側には醜い感情を潜ませている。

人を信じる奴が馬鹿をみる。信じて壁の中に入れたら、自分が傷つくのを知っている。だったら誰とも深く関わらず、一人でいる方が、あとで傷つかなくて済む。

そう、思っていたから。

Chapter2

「西崎～古典の課題、職員室持ってってよ」

教室に入った俺に、友達と机を向かい合わせて話し込んでいたのを途中で遮って、教卓を指差して言った。
指の先には、山のように積み重なった課題たち。

伊原美咲。幼稚園からずっと一緒の腐れ縁。

昔はすぐ泣いて俺のあとを追い掛けてたのに、今は容姿端麗、品行方正、なのに優等生ぽくなくて面倒見もよく、男女問わず人気者。

美咲の周りには必ず人だかりがあって、俺とはまるで正反対。生きる世界がこんなにも違いすぎるようになったのは、いつからだっただろうか。

周りから孤立するようになった俺に接してくる奴は、学校中で美咲ぐらいだろう。

「……何で俺が」

「遅刻してきたから～。まさかこんな重いの、あたしに持たせる気じゃないでしょうね？」

他の奴だったらムカつくのに、美咲が言うと、無意識に黙ってしまう。

「……」

「よろしくね、『智くん』♪」

俺のことを『智くん』と呼ぶのは、美咲だけだ。中学のときに『西崎』と呼ぶようになったが、何か頼むときだけ『智くん』に戻るのだ。

今や問題児扱いもせずに近づいてくるのは美咲だけだ。どこか心地よいと感じてるのも、また事実だった。

「ちょっ……美咲〜！あんた西崎なんかと関わるのやめなって」

「何で？普通だよ」

「だって、あいつ何か恐いじゃん。すぐキレるし〜」

「そっかな？…西崎！じゃ、頼んだからね〜」

その無神経な奔放さが、人を引き付ける魅力なのだろうか。

この気楽さが、無性に羨ましかった。

Chapter3

仕方なく美咲の言う事に従った俺は、課題を腕に抱えて廊下を歩いていた。

と、視線の先に加野の姿が映った。あちらも同様、大量のプリントを持って向こう側から歩いてくる。

無視してすれ違おうとしたその瞬間、俺の視界が一瞬白くなった。

冷静に辺りを見回すと、足元に風で舞い上がったプリントが散らばっていた。それを加野が必死でかき集めている。

プリントの上を踏み付けて行こうかと思ったが、目の前でしゃがみ込んでいる加野が無性にうっとうしくて、黙って床のプリントを集め始めた。

「西崎くん?!」

目を見開いて俺を見つめる加野。

「……」

「拾ってくれるんだ～ほんとにありがとう！」

「……べつに、歩くのに邪魔だったから」

「あっ、そうだよね！私ほんとに鈍臭くて。参っちゃうよね（笑）」

「……そこ、残ってる」

嫌みも嫌みととらないのか、この女は……。
脳天気というか、過度なポジティブというか……。

「ありがとう～すっごい助かった！」

「……べつに」

「西崎くんってちょっと恐いイメージあったんだよね～。他の子とは違うっていうか」

そんなこと、面と向かって本人に普通言うか？

「でも、やっぱり優しいんだね」

「……はぁ？」

「それだけ。それじゃあ、また！」

……変な女。俺が『優しい』？

でもあいつ、俺を避けたりしなかった。

……他の先公とは、何か違う。

これが、俺と彼女が初めて言葉を交わした瞬間だった。

Chapter4

春の夜は、好きだ。風や温度、匂いの全てが心地よい。
昔から春の夜はよく家をフラッと出る。何をするでもなく、あてもなくふらふらしている。

こんなこと、誰にも話したことがない。
こんな乙女な奴だと思われたら、確実にナメられる。

「智也！こんな時間にどこ行くの？」

「……」

「智也！」

わざわざ動作の目的を聞かれるのは好きじゃない。
母親の声も無視して、夜の街に繰り出した。

行き交うホストや金持ちそうなキャバ嬢の間を通り、いつものように目的もなくふらふら歩く。
こんなとこにいるのを見られるから、恐そうなイメージになるのか。

「や、やめてください！」

「なぁ～そんな堅いこと言わずにさぁ～」

「ちょっと気持ちぃぃことしよってだけじゃん？」

「ほんとに困るんでっ！放して！」

思わず足を止めてしまった。

今までこんな状況に遭遇しても、一度目を向けるだけで無視して通りすぎていた。

こんなのに捕まる方も悪いと思っていた。なのに……

「誰の女に気安く触ってんだ？」

「あぁ？」

「聞いてんだ、答えろ」

相手の男の片割れが、ふいに顔を強張らせた。

「お、おい、やべーって……」

「何が」

「こいつ、城咲高の西崎じゃん！やべーって！」

「くそっ！行くぞ」

女を残して走っていった。何でそんなに関係ない奴にまで恐れられてんだ？

通り過ぎようとしたとき、絡まれていた女が顔を上げた。

Chapter5

「あの、ありがとうございました！」

「べつに……あ……」

「えっ、西崎くん！？何でこんなとこに……」

加野だった。帰宅途中なのか、まだきっちりした姿でいた。

「……」

「何その、『まずった！』みたいな顔（笑）私、家この辺なの～一人暮しし始めたばっかで」

こんな治安の悪いとこに一人で住んでんのかよ。意味わかんねー女……無防備すぎるだろ……。

「あ、夕飯食べた？よかったらうち、来る？」

「はぁっ？」

「一人だと作りすぎちゃうから。ねっ！」

ほんとに、こんな無防備な奴、見たことない。
女っていうと、こっちにその気がなくても、勝手に警戒するような生き物だと思っていた。
危なっかしくて、ほっとけない奴。そんな風に女を見たことなんかなかったのに……。

「……お前一人じゃ危ないから……行ってやってもいい……けど……」

15分後、俺は加野の家のソファーに座っていた。
加野の家はワンルームマンションで、女らしい家具が並んでいた。
レースのカーテンや巨大なくまの縫いぐるみなんか、俺とは全く無縁の代物だ。

「はい、出来たよ〜」

「……これだけ？」

小さい茶碗に軽く（加野よりは多い）盛られたご飯と味噌汁、あとは湯気のたっている、冷凍食品の数々……。

「作ったってか……味噌汁だけじゃ……」

「冷食嫌い？おいしいよ？」

「そりゃそうだろうょ……貸して、フライパン」

加野にフライパンを借り、冷蔵庫にあるものを物色して炒めた。
加野は、俺の横で見た目が変わっていく色とりどりの野菜たちに、目を丸くして見つめていた。

「……すっごぃ～！手際いい！フライパン片手で持ってる！」

「皿」

「は、はい！」

俺特製・ソーミンチャンプルー。
つーか、何で食材は揃ってるのに冷食なんだ？

加野と一緒に食べ（ほとんど加野がしゃべって食べた）、家をあとにした。

変な奴。でもあいつと関わる度、あいつを思い出す頻度が多くなるのは……なぜ？

あいつを見ると、妙に微笑ましく思えるのは……なぜ？

Chapter6

気付けば6月末に差し掛かっていた。

あの夜から、無意識に加野を目で追うようになっていた。

授業中も、移動中も、加野の声がする度に、声のする方を見て姿を探していた。

べつに『好き』とかそういった恋愛対象で見てるわけじゃなくて……何ていったらいいんだろう。

俺自身もいまいちよく分かってない。

こんなに見る度、微笑ましくも辛くなるのは……初めてで。

俺自身、どうしたらいいのか、全く分からない。

「……西崎くん」

慌てて顔を上げた。気付けば6限、加野の授業中だった。

またしても無意識に加野を見つめていたらしく、気を戻すと加野の

顔が目の前にあった。

「……っ！？！？」

思わず立ち上がる。

「寝てたでしょ。目の前まで行っても、全く気付いてないし（笑）」

「……」

実際は、寝てない。加野を見ながらぼーっとしていた。

教室中で苦笑が聞こえる。

美咲までもが後ろを向いて笑っている。

「西崎くん課題も提出してないよね。放課後、居残り！」

…はぁ～っ！？

お前に関係ねーだろ……。

放課後、帰るわけにもいかず、英訳と戦っていた。

「あれ～マジでやってんじゃん」

「美咲。……うるせぇ、おとなしく帰れよ」

「せっかく英和辞典貸してあげよーと思ったのに」

「へ？」

「ないんでしょ。……何その訳。ｂｅｎｅａｔｈは『～の下に』でしょ。ベニスってイタリアの街じゃん（笑）スペル違うし」

「……分かってるよ」

その後、美咲は散々俺をからかって、帰り支度をしだした。

「……帰んの？」

「まーね。あたし勉強しなきゃ！……ウソウソ（笑）」

「ふぅーん……」

「早く課題やって、美人な加野先生んとこ行きなょ～」

「……加野が美人？」

「だって男子みんな言ってんじゃん。……加野って西崎のタイプの顔だし」

心なしか、美咲の顔に陰りが一瞬見えた気がした。

「……早く帰れよ」

「うん。バイバイ！」

陰りは俺の見間違いだったのか、すぐに元の笑顔になって教室を出ていった。

「……っしゃぁ、終わり……！」

下校時間を過ぎた頃、やっと最後の訳が終わった。

急いで職員室に向かうと、会議なのか誰もいない。

中に入って一番奥の列の窓際が加野の席だ。

「か……っ」

俺は目を奪われた。

加野が椅子にもたれて眠っていた。

その細い髪や睫毛に夕陽が射して透けて、金色に輝いていて……

俺は無意識に、加野の唇に自分のそれを、重ねていた。

Chapter7

あれからも、加野の俺に対する反応は、全く変わらなかった。

要するに、気付かれなかった。

ホッとした反面、なぜか淋しい気持ちに襲われて、現在自己嫌悪中。

キスくらいでこんなに焦る自分が信じられない。

べつに初めてしたわけじゃない。

もっと深いのも、既に経験済みだ。今まで女に困ったことはない。

なのに、なぜ今になって、こんなに焦るんだ？

「なぁ～西崎。お前、花火大会誰かと行くわけ？」

前の席の……たしか高橋という奴だったと思うけど……が聞いてきた。

高橋はたぶん中学から一緒で、明るい高橋と俺とでは、全く正反対の生活を送っていた。

「……たぶん行かね」

「マジ？絶対伊原と行くんだと思ってた。お前ら仲いいし……」

「……伊原？」

確かに俺がしゃべる女は美咲ぐらいだが……

全く予想外の返答に、拍子抜けした。

「何で……べつに、美咲は幼なじみだから……」

「付き合ってはないの？」

「あぁ」

「じゃさ、伊原に紹介してよ！俺実はずっと気になっててさ～」

「同じクラスなのに？」

「伊原と関わったことねーし…。なっ！頼む」

仕方なく引き受けることにした。渋々立ち上がり、高橋に半ば連行されて美咲の前に立つ。

「なに？またノート？」

友達と話していた美咲が、俺が近寄ると急に顔をあげた。何故だかものすごく嬉しそうだ。

「……何か、紹介してほしいんだって」

急に顔が曇る。高橋のことが嫌いなのか？美咲にも好き嫌いがあるのか……。

「そう……」

それに気付かない高橋が、照れながら話しかける。

「花火大会、一緒に行かない？」

意外と直球だ。

「……西崎はどーすんの？」

「俺は……行かね」

「ふ～ん……いいよ、行こ！」

笑顔を向けられうろたえる高橋を引き連れ、教室を出る。

「ありがと～マジ助かった！」

「……」

最近、美咲の表情の変化が多くなった気がする。……気のせいか。

Chapter8

町の一大イベントである花火大会のムードで学校が包まれ始めた頃。

相変わらず加野を目で追いながら、毎日を送っていた。

さすがに、変態かも……俺……。

あんまり見てると、周りにバレてしまう。

だったらいっそのこと、花火大会にでも誘うか？

だけどそんなことしたら、あいつ拒否するかな。

女を誘うのなんて、かなり慣れてるはずなのに……

そう思いながら、職員室のドアに手をかける。

教師なんて、俺の顔を見れば必ず何か言う。

また面倒なことになったら、加野にまで迷惑かかるかな。

「……加野、いる？」

入るなり近くの日本史の畑中に聞くと、

「西崎！教師を呼び捨てにするな！」

ほら来た。優等生には甘いくせに、俺みたいなのにはこんな扱い。

「だから、いんのかって聞いてんだよ」

「きさま……」

「畑中先生？……西崎くん？」

畑中の声に驚いたのか、後ろから加野が顔を現した。

「加野先生……」

「……加野、ちょっと」

反射的に困惑する加野の腕を掴み、外に出た。

背後からまだ畑中が何か叫んでいたが、振り返らずにまっすぐ人気の少ない階段の踊り場まで加野を引っ張っていく。

「ちょ……西崎くん、どうしたの？」

周りに人がいないのを確認すると、ぱっと手を離した。

勢いあまって連れて来たものの、これからどうしたらいいのか。

「……」

「……？」

「……」

長い沈黙を破り、高橋に倣った直球でいくことにした。

「……だからっ……その、花火大会、行く？」

やっべ。何で緊張してんだ、俺！何で赤面してんだ、俺！

一瞬きょとんとした加野は、物事を理解したようで

「あ～うん！」

よかった……と安心しきった次の瞬間。

「でも、誰と行こうかな～って考えてて」

……

……？

……え？

……もしかして、俺が勇気を出して誘ってることに、気付いてない？

緊張が高まっていたせいか、妙に力が抜けて不思議と笑いが込み上

げて来た。

俺がなぜ笑ってるのかも、全く理解できてない加野。

そんな加野がたまらなく愛しくて、笑いが止まらなかった。

「じゃなくて、俺と」

「へっ？」

「一緒に行こう」

案外さらっと言えた。

加野は少し考え、俺の好きな笑顔でこう言った。

「うん」

Chapter9

加野を誘ってからというもの、俺は常にそわそわしていた。

しかも挙動不振。授業なんて、聞いていられない。

……そんな浮かれた俺は、すっかり忘れていた。

花火大会の日に追試がある、畑中の小テストの存在を……。

加野を誘うのに成功した俺は相変わらず浮かれてて、当然追試に、ひっかかってしまった。

花火大会に誰からも誘われない畑中が行く奴をひがんで、わざわざ花火大会の日に追試を設けるにちがいないと、誰かが言っていたのを聞いたことがある。

理由はどうあれ、追試にかかってしまったのは事実だ。

自分で誘っておいて、断るのか。

……嫌だ。

俺は加野と行く。

黙って抜ければ、晴れて花火大会だ。

しかし……

「西崎くん、追試かかったって？」

バレてる。

「うぁ……でも、畑中のなんか抜けたら……」

「絶対ダメ！これでも教師ですからね。認めません」

「でも、それじゃあ……っ」

俺が加野と見れなくなるじゃんか。

なんて言えるわけもなく。

「……加野が花火大会行けんくなるじゃんか」

「え？まぁ……ちょっと残念なのは残念なんだけど……」

くっそ～、せっかく勇気出して誘ったのに！

「……わりぃ」

「……あっ！そうだ！いいコト思いついた♪」

何だよ……行く相手、他にいるのかよ……。

「追試、ちゃんと勉強してね！じゃっ」

そうして満面の笑顔で去っていった。

あとに残された俺は……

「……はぁ。何やってんだ、俺……」

落胆した俺の背中に、夕焼けの光が寂しく溶けていった。

Chapter10

沈みこんだ俺は何にも手につかず、結局全く勉強しないまま追試の日を迎えた。

花火大会に行くため、楽しそうな笑い声をあげながら廊下を歩く生徒。

そんな中、追試にかかった哀れな数人の生徒たちは、せめて早く解き終わって帰れるように、必死で勉強していた。

しかし、俺は急ぐあてもなくなったので、無関心に窓を眺めながらシャーペンを回していた。

だんだん陽が落ち、暗闇に包まれ始めた。

「はい、参考書しまって！解き終わった奴から帰ってよし。はじめ！」

この時ほど畑中を恨んだ瞬間はない。

あのハゲはじめた頭を、思いきり叩きのめしたい。

そんな衝動を押さえつつ、テスト用紙に目をうつした。

ほとんどの生徒が帰り、教室に残っているのは、俺と知らない奴だけになった。

分からん。

勉強してないから当たり前だが、満点になるまで帰れないなんて聞いてない。

たかだか日本史のくせに……。

しかしその知らない奴も帰り支度を始め、俺と畑中だけが教室に残

された。

「おぃ～まだ出来ないのか」

「うっせぇよ」

「もうお前、帰れ。２は確定だからな」

「…全然かまわねぇっの……」

最後は畑中の慈悲で追試が終わった。

畑中は答案を持ってとっとと帰り、何の音もしない教室に一人、残っていた。

ひゅっ……バーン……

始まったようだ。時計を見ると、８時だ。追試は7時までのはずだったのに……。

といっても急ぐ必要もなく、ゆっくり鞄を持って廊下に出た。

涼しい風が入り込み、妙な静けさが心地よかった。

俺の背後に、何か気配がして、勢いよく振り返った。

が、誰もいない。

「ホラーかよ……」

気を取り直して帰ろうとしたその時。

Chapter11

「きゃああっ……」

突然暗がりの中から聞こえてきた悲痛な叫び声と、その後響いた痛々しい物音に、思わず振り向いた。

「……誰か落ちたのか…？」

声の聞こえてきた階段と思わしき場所に行ってみると、下の方で何かが動いていた。

「……加野！？」

「あ、西崎くん……（笑）せっかくびっくりさせようと思ったのに、失敗」

「何でこんな時間に……」

突然何なんだ、この女……。

やっぱり変わった奴だ。

「……て、大丈夫か？！」

「うん……（笑）」

急いで踊り場まで駆け降りると……

「……浴衣？」

「あ～うん（笑）ちょっとでも花火大会気分になれるかなーって」

「……」

「あっ、タコ焼き買ってきたの！あと焼きそばと、りんごあめと、わたがしと……」

何なんだ……。突然俺のために浴衣で学校来たり、いろんなものを買って並べだしたり……。

こいつ、やっぱり他の奴とはちょっと違う。

「……やっぱ…似合わない、かなぁ？」

自信なさそうに浴衣の袖を見つめる加野。

紺地に桔梗の和柄の浴衣が、色白の加野の肌を艶やかに引き立たせる。

さらに普段は下ろしている髪をまとめ上げ、うなじに後れ毛が揺れているのを見て、どうにかなってしまいそうなくらいに動揺してしまった。

「……っげぇ、可愛いっつの……」

いちいち女を褒めるのに照れる自分が恥ずかしくて、無意識に赤く火照った顔を覆い隠すように、右手を口元にあてた。

俺がどんな心境で言っているのか分かってるのかいないのか、嬉しそうな顔で微笑んだ。

「……来て。ちゃんと手当する」

俺が沈黙ん破って立ち上がると、予想外の展開だったのか大きく首を振った。

「いい、いい。花火終わっちゃう……」

「でも、傷、残ったら困るから」

一瞬迷ったが思い切って加野の手首を持って立ち上がらせ、袋を持つと歩き出した。

加野は少し戸惑いながらも、おとなしくついてきた。

Chapter12

ついたのは、保健室。

俺が鍵を取ってきて開ける間、加野はおとなしく待っていた。

「……警戒、しないの？」

普通の女なら、夜の保健室に連れ込まれそうになったら少しは警戒するだろう。

べつにやましいことをするわけでもないが、不思議に思って聞いてみた。

「へ、何で？」

「だって……夜の保健室とか、フツー焦るだろ」

「何で？西崎くんだもん」

……俺は男としても見られてないのか。

まぁ、そういう純なとこがいいんだけど。

「……入って」

加野を椅子に座らせると、棚を探ってガーゼや消毒液を出した。

黙ってピンセットで消毒液をつけた綿をはさみ、ガーゼで押さえながら傷口につけた。

新しいガーゼを紙テープで固定すると、加野は感心したように息をはいた。

「すっごい手際いい！何で？」

「……何となく」

「あたし絶対ムリだぁ～……すごいなぁ！」

小さい頃から傷の手当は見よう見真似で覚えてきた。だけど使うあてもなく今までしたことなかったが、加野には反射的にやってしまった。

「……屋上、行こう」

あんまり加野が褒めるから、無性に照れてしまって、わざと乱暴に加野の手をひっぱった。

屋上に着くと、花火は終盤なのか、連発で上げられた花火が夜の空に美しく咲き乱れていた。

「うっわぁ～…キレー……」

夜風も心地よく、俺は冷たいコンクリートの床に座って、りんごあめを口に入れた。

俺たちはしばらく無言で見とれていた。

加野は空に咲く花火に。

俺は花火を見る加野に。

「ねぇ西崎くん」

ふいに話し掛けられ、ずっと加野を見つめていた俺は慌てて目線を

はずした。

「なに？」

「西崎くんが追試になってくれて、ラッキーだったかもね」

「え？」

「だってここ、花火もよく見えるし、風も気持ちいいし……」

無邪気に笑う加野の顔を、花火の光が艶やかに照らす。

俺は黙って加野の横に立ち、フェンスにもたれかかった。

「……俺、好きなんだ」

「花火が？たしかに綺麗だよね～」

「ちがくて、加野が」

沈黙に耐え切れないように、花火が何発も打ち上げられる。

加野は目を見開いて俺を見つめている。

俺はそらすこともなく、加野の瞳に映る自分をずっと見ていた。

「俺、加野が好きだ」

もう一度言う。

何回でも言ってやる。

「西ざ……」

口を開きかけた加野の唇を、自らのそれで覆う。

優しい、それでいて力強いキスをした。

唇を離すと、加野は微笑んで、欲しかった言葉を言った。

「……あたしも、だよ」

「……えっ…マジで？」

こっくり頷き、照れたように笑って、ゆっくり静かに目を閉じた。

もう一度キスを落とすと、花火が二人を明るく照らし出した。

「……甘い」

俺らの初キスは、夜風に香る花火の匂いと、俺の舐めていたりんごあめの味だった。

Chapter13

2学期が始まった。

あの夜から一度も顔を合わせなかったが、一応俺らは付き合ってる。

……と言っていいはず。

実のところ、加野は少しそっけない。

1. 学校では普通の生徒と先生でいる

2. 学校では名前で呼ばない

3. 廊下ですれ違っても、今までどおりにする

こんな条件を出したのは俺の方で、もちろんそれは加野を考えてのことだ。

だけど……こんなに律儀に守らなくても……。

廊下で会っても、何もしてはいけない。

……好きなのに。

付き合ってるのに。

生徒に囲まれて笑っている加野を見ると、嫌でも自分と加野は立場が違うことを思い知らされる。

せつなくなる気持ちを押し殺し、加野に近づく。

「加野」

周りに生徒がいなくなった瞬間を見計らい、そばに寄る。

「西崎くん」

どこかそわそわしだす加野。心なしか、顔が赤い。

「……バレちゃうよ。そんなかわいい顔してたら」

わざと耳元で、吐息まじりの声で囁いた。

面白いくらいに顔が沸騰しだす。

「西崎くん！」

「今日家、行ってもいい？教えてほしいことあるんだけど」

「……絶対ウソだね」

「えっ、何で？」

「そんなことするわけないもん、とも……に…あなたは」

『あなた』とか、彼氏というより夫婦……？

とかいう俺の勝手な妄想を無視し、小声で言った。

「今日、ハンバーグ作って待ってる」

やっぱり加野は彼女だ。

少し安心したところで、ケータイを差し出す。

「なに？」

「まだ連絡先、知らねーから」

「あっ、ちょ、ちょっと待って」

あたふたとノートの端をちぎり、ペンで何かを書いて、周りを見回しながら渡してきた。

「じゃ、またね」

渡された紙には、電話番号とアドレス、そしてハンバーグの落書きが書かれていた。

Chapter14

実は、俺と加野……じゃなくて亜希は、まだキス以上はしてない。

俺だって今までそこそこ女がいたから、会うたびいつも体を重ねてた。

けど亜希に会って、それが何か悪いことみたいに思えてきて……いまいち強く押せない。

もっとも、まだ付き合い始めて間もないし、きっと亜希もすぐにしたくなるはず。

……そのときは、そう思ってた。

亜希が仕事終わるまではまだ時間があったから、家に戻って私服に着替えた。

デートのときは、あえて少し大人びた色の服を選ぶ。

できるかぎり、自分が学生で彼女が教師だと、亜希に意識してほしくないからだ。

自宅のワインラックから1本抜き取り、そっと紙袋に潜ませた。

安めの赤ワイン。

親は、ワインラックから徐々にワインが消えていってることに気付いてない。

時間をつぶしてから亜希の家に向かう。

玄関でインターホンを押すと、愛しい彼女が迎えてくれる。

「いらっしゃい」

「これ、一緒に飲もうと思って持ってきた」

そう言って紙袋を渡す。

「わっ、ワインじゃない！」

「安物だけど……じゃ、ご飯のときに……」

「えっ、私だけ飲んでいいのかなぁ？」

「へ？いや、俺も飲むから」

「ダメ！智也くんはまだ未成年でしょーが」

「いいじゃん、俺いっつも飲んでるし」

「ダメダメ～！」

断固として譲らない亜希。こういうときだけ教師ヅラかよ。

「また俺をガキ扱いしてるだろ」

「そんなことない……」

「亜希……」

亜希の言葉を遮って、唇を奪う。

舌を絡ませた、濃厚なキス。

ゆっくりそれに応じる亜希は、かなりやらしい。
きっと彼女は気付いてないだろうし、もっともキスに溺れさせてるのは俺なんだけど。
腰に手を回して抱き寄せ、一度離して角度を変えてまた絡ませる。
数分が経過したあと、赤い顔で下を向いた亜希が、消え入るように呟く。
「……ずるぃ」
「ガキ扱いした仕返し。俺、ガキっぽかった？」
「……ばか」
いつもはもっと軽いキスだが、今日はちょっと怒ったから深くしてやった。
俺は正直、かなり上手いと思う。
これで亜希がヤりたいと言えば抱くつもりだったが、さすがは教師。そう簡単には言わない。

「……ハンバーグ、できてるょ」

亜希を抱き寄せ、もう一度額に小さくキスしてから、ダイニングにむかった。

Chapter15

ハンバーグを食べ、二人で食器を洗ったあとに、ソファーで寄り添って座っていた。

「亜希、最近ちょっと料理、上達したんじゃね？前まで冷食だったのに」

亜希の肩に手をまわし、抱き寄せながら囁いた。

「そうでしょ！実は家庭科の佐々木先生に、毎週料理習ってるの」

自慢げに言うその口調がすごく可愛くて、もっと近くに引き寄せた。

「佐々木って、あの佐々木理香子？」

「うん。何で知ってるの？習ってないよね」

「いや、キレイだから目つけてたの」

「えっ！」

焦って俺の腕にしがみつく亜希。

反則だろ、可愛すぎだっつの。

「ジョーダンだよ。クラスの佐野がさ、理香子マジ好き！って叫んでんの聞いて、美咲に聞いたわけ」

「な、なんだ、伊原さんか～！たしかに佐々木先生すっごく美人だよね。女の私も見とれるくらい」

「え、もしかしてお前、レ……」

「ズじゃない！」

「ばか、なぐんなって。ジョーダン」

亜希のパンチを避け、頭を撫でながら優しくキスすると、おとなしくなった。

ほんと、犬みたいな奴。

「……これ、卒アル？」

ふと本棚に目をやると、アルバムらしきものを発見した。

「あ、うん」

「見ていい？」

「どーぞ」

開くと、うちの学校のアルだった。

「亜希、うちの卒業生なの？」

「そーだよ。言ってなかったっけ？」

「うん。……何組？」

「ないしょ。探してみて（笑）」

パラパラとめくっていくと、《加野亜希》と書かれた写真を見つけた。

まだ少しあどけない顔立ちの亜希が、うちの制服を着て笑ってる。

「かわいー」

「やだ、もう見つけたの？」

「俺、彼女にしたい」

「ばーか。それ褒めすぎ」

きっとこんなにかわいかったなら、相当モテただろう。

ふいに寂しくなって、亜希を抱きしめた。

「なになに、どうしたの？」

「……」

亜希、誰かにとられないよな？

変な不安が俺を襲う。

そんな俺をよそに、亜希はある一人の男の写真を指した。

「これ、化学の滝本先生。一緒に委員長やってたんだよ～」

言い表せない不安が纏わり付く。

「そっか……」

不安を完璧に表に出さないほど大人じゃないガキの俺は、こんな言葉を搾り出すのが精一杯だった。

chapter16（前書き）

長らくお待たせしました。

chapter16

「あ～っ！！加野ちゃんと化学の滝本、ツーショット♪」

クラスのザ・KYこと湯川清孝（最近おぼえた）が、写メをみんなに見せびらかす。

いつもどおりにする、という亜希との約束を守るため、表面上は無表情になるよう努めた。

……が、内心かなり動揺してた。

きっとこの焦りを表情にあらわしたら、俺は相当ひどい顔になるはずだ。

クラス中が写メで盛り上がる中、俺は何気なく、を装って教室を出た。

廊下に出ると、湯川が言ってたとおりの光景がそこにはあった。

亜希と、滝本。

滝本は化学の新任教師だ。

わかりやすい授業と、あの某アイドル事務所も真っ青の甘いルックスのせいで、校内の女子は奴に夢中だ。

化学を習ってない奴まで滝本親衛隊を結成してるんだから、相当なものだ。

二人は仲良く談笑していて、同い年だし美男美女だしで、すっごくお似合いだ。

見てると辛くなり、とりあえず二人から離れようと思った、そのとき。

「西崎？」

「……美咲」

教室から顔を出したのは、美咲だった。

「あ、ＫＹが言ってたの、ほんとだったんだ～」

俺の心情を知るはずのない美咲の言葉は、俺にさらに追いうちをかける。

「……みたいだな」

「なに～もしかして、傷ついちゃったりしてんの～？」

からかうように笑う美咲に、まさか『そうです』なんて言えるわけなくて、ただ必死で無表情をつらぬいた。

「……まさか」

「だよね。西崎が先生好きなはずないもんねー。しっかしあの2人、お似合いだね！」

……ごめん、美咲。

俺、マジに先生が好きなんだ。

……言わねーけど。

「……わり、俺次サボる」

「もー（笑）そろそろ日本史、ヤバイんじゃないのー？」

そう茶化す美咲に返事も返せないくらい、俺は内心乱れていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9917b/

Dearest

2010年10月31日13時32分発行